

## 令和6年度 第4回コンソーシアム連携協議会の記録（抜粋）

### 協議1 今年度の事業の振り返り

- 今回のひなたのつどいは、映画から講演の流れでプログラムを構成したのが良かった。
- ひなたのつどいの会場は、場所や広さがちょうどよかった。専用駐車場が無かった。後方の席からステージが見えづらかった。
- ひなたのつどいで、モニターでの要約筆記など、聴覚障がいへの配慮がとてもよかった。
- 様々な立場の方が登壇したことが良かったので、この流れを来年度も継続してほしい。
- オンライン参加者の音声は、制限できなかったのか。コンファレンスとは関係ない参加者の音声が流れ続けていたので、次年度は、ウェビナーなどを活用してはどうか。
- 講演が長引いてしまったが、シンポジウムで会場参加者の意見をもらう時間を確保できるとよい。
- ひなたのつどいについて、報道機関への放送は、特別感を出しすぎているように感じる。報道関係者を、コンソーシアム委員に加えることはできないのか。
- 都城市の取組は、中学生や高校生がボランティアとして参加したこと、支援学校の医療的ケアの児童が参加したこと、防災をテーマに地域でのつながりを意識できたことが良かった。
- コンソーシアム連携協議会委員の外山さんが中心となって作成した「つながる新聞」は、都城市生涯学習課の事業内容がよくまとまっており、皆さんから良い評価を受けている。
- 延岡市の取組は、当事者の方が運営委員に加わったのは、素晴らしいことだと思う。当事者の目線を大切にできた。
- 参加者の中に、次の運営委員として関わりたいと要望を伝えてきた方もいた。人や事業に広がりを感じてきている。
- 事業の周知に、課題を感じる。卒業生保護者会などの団体にどう伝えていくか、支援学校の保護者にどう伝えていくかなど検討していきたい。
- 北部地区のイベントが重ならないように、お互いに連絡し合うなど留意する。
- 当事者のニーズ把握が大事で、福祉課との連携強化によって、どのくらい人や社会と関わりたいかなど調べていきたい。
- ボランティア等を募る際の配慮も考えていきたい。求めるものが高すぎると、ボランティアが集まらない場合もある。
- 合理的配慮についての発信の仕方は、工夫や配慮が必要。

### 協議2 次年度の事業展開と方策について

- これから設立される高等特別支援学校で就職を目指す生徒は、ボランティアとして、看護大学のイベント作りに企画立案に参加したりすることも考えられる。
- 特別支援学校の高等部の生徒は、グレーゾーンの生徒も多く、意思疎通が図れることが多いので、企画会議等にズームで参加しても良いかもしれない。明星視覚支援学校やみやざき中央支援学校等。
- 講座の当日に参加できなくても、企画などに関わることを楽しむ生徒もいる。
- コンソーシアム連携協議会には、卒業生の保護者が作った団体もあるので、何を学びたいか、調査してみるのも良い。
- 生涯学習は、本人の意見を尊重して何を学びたいか決めていくことが大事。
- 知的障がいのある方は、生活年齢と噛み合わずに参加を見送る場合がある。小学生から参加できる講座であっても、実年齢が高いために、参加しない場合もある。
- 都城市は、今年度の取り組みを継続して次年度もやっていきたい。
- 特別支援学校の家庭教育学級と連携することも考えられる。
- 小林市は、公民館講座の中で実施するよう検討している。